

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月22日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20519003

研究課題名（和文） ボルネオ島中央部における生態資源に関する民俗知識のネットワーク

研究課題名（英文） Network of local knowledge regarding ecological resources
in the central part of Borneo

研究代表者

小泉 都 (KOIZUMI MIYAKO)

京都大学・農学研究科・研究員

研究者番号：00506884

研究成果の概要（和文）：

ボルネオ島の森林地域に暮らす複数の民族を対象として、自然利用を支える知識や文化の動きを現地調査にもとづいて研究した。村落内での知識の伝達は、個人の興味や自然利用の機会に大きく左右されていた。自然利用は、直接的な技術的知識だけでなく、その利用を円滑に行えるような行動様式や倫理に支えられている場合もあった。民族間で知識の伝達が起こる場合、技術的な知識の導入に比べて、行動様式や倫理の転換は難しいようだった。生活様式と自然環境のいずれも急速に変化しつつある現在、自然利用が著しく減少している集団も存在する。

研究成果の概要（英文）：

Dynamics of knowledge and culture of natural resource use were studied. Fieldwork was conducted in local communities in forest areas of Borneo. Knowledge transmission within a community mainly depended on personal interest and opportunities to use natural resources. Natural resource use was supported not only by direct technical knowledge but also by behavior and ethics related to the use. Technical knowledge was relatively easily adopted by different ethnic groups, but behavior and ethics were not. In some communities use of natural resources has been much decreased because of social and environmental changes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	0	600,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
総計	2,800,000	660,000	3,460,000

研究分野：民族生物学

科研費の分科・細目：人文学・地域研究

キーワード：ボルネオ、民族生物学

1. 研究開始当初の背景

ボルネオ島は世界でも生物多様性の最も高い地域の一つだが、その中央部は森林が比

較的多く残る一方で開発が進みつつある地域である。

このボルネオ島の中央部には様々な民族

が暮らしており、生業体系、社会構造、民俗知識などは一様ではない。

このため、複数の民族を対象にした生態資源についての知識の様相に関する研究は、ボルネオ島中央部の自然環境やそこで育まれてきた文化の行方を考えるうえで重要だと考え、本研究を計画した。

2. 研究の目的

生業体系や社会構造が異なる民族が共存するボルネオ島の中央部において、生態資源に関する知識の集団内・集団間のあり方を研究するとともに、それが近年の社会変容からどのような影響を受けているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

現地調査としてボルネオ島の狩猟採集民や農耕民の村落に滞在し、観察や聞き取りによりデータを収集した。

また民俗知の対象植物を採集して、ボゴール、サラワク等の植物標本庫を利用しながら同定した。

4. 研究成果

集団内での知識の伝達に系統だった方法はみられず、知識の習得は個人の資質や生態資源の利用の機会に大きく左右されていた。また集団間の知識の伝達はランダムではなく、農耕民から狩猟採集民へという方向が優勢だった可能性が高い。

生態資源の利用は、利用方法といった直接的な技術的知識だけでなく、その利用を円滑に行えるような行動様式や倫理にも支えられている場合がある。ただし、技術的な知識の導入に比べて、行動様式や倫理は転換が難しい。

生態資源の利用は、生活のその他の側面との兼ね合いや、当然のことながら周りの自然環境に左右されている。生活様式、自然環境のいずれも急速に変化しつつある現在、森林資源の利用が著しく低下している村落も存在する。

意識的に生態資源利用の知識を存続させようとしなければ、集団全体として知識を失う人々もでてくるだろう。伝統の継承を無批判に推奨する必要はないが、無自覚に自文化を失うこともまた望ましくない。生きた文化の存続には、資源利用を継続できる環境を確保すること重要だが、それは容易ではない。

以下、具体的な個別の知見を示す。

(1) どの民族についても、定型的な知識伝達

の方法はみられなかった。聞き取りからは、個人の興味や活動が知識の習得に大きく影響している様子が示唆された。日常的な狩猟採集のほか、現金収入源となる資源の長期採集行も、学習の機会となっていた。

(2) 狩猟採集民は、多くの人々が近隣の農耕民の少数民族の言葉を話すことができる。民話や植物利用を含めて様々な情報を農耕民から得ていた。一方、農耕民で狩猟採集民の言葉を理解できる人はごく少数である。民俗知の集団間の交流は、農耕民から狩猟採集民へという方向が優勢だった可能性が高い。

(3) 食用果物や建材は、民族間で利用植物群がよく似ていた。薬用植物はかなり異なっていた。

(4) 農耕の導入から数十年を経ても、自分たちが期待するほどの収穫を得られていない狩猟採集民の集団が多く存在する。これは、農業技術の知識の問題というより、農作業における計画性の欠如など生業に関わる文化の問題だと考えられる。

(5) 狩猟採集民、農耕民ともに、森林が残る地域では、狩猟、森林の小川での魚毒漁、果物の採集、ラタン採集、建築用木材の切り出し、薪採集（二次林）、沈香採集などに森林をよく利用していた。木材伐採が進んだ地域では森林利用が少ない。

(6) 1970年代を中心に進んだ狩猟採集民の定住化、1980年代以降の森林開発や現金経済の浸透が、個人や集落の森林利用に大きく影響している。またマレーシア・サラワク州では、小学校から寄宿生活が基本となっており、教員は半島マレーシアから派遣される若い人が多い。学校教育の浸透も今後大きく影響してくると考えられる。

これまで公表したなかで、もっとも主要な成果だといえる論文（上の(4)に関連する）（下の雑誌論文の①）の要旨を以下に記す。

即時報酬システム（労働投入に対して食料がすぐに得られ、その食物をすぐに消費するという食料獲得と消費様式）をもつ狩猟採集民社会でみられる社会的特徴は、その社会が新しい生業システムを導入したときに変化するだろうか？

インドネシア、東カリマンタンのプナン・ブナルイの事例を報告する。かれらは、1950年代から1970年代にかけて村に定住し始め、焼畑稲作を導入していった。

プナン・ブナルイのある1村における食事および家計データと社会関係の観察から、こ

の集団はまだ移行段階にあると判断した。村人たちは、4つの大きな問題に直面している。

1) 労働分配の計画の不完全さによって引き起こされる不十分な米の収穫。

2) 過度の消費と広い分配によって引き起こされる貯蓄の欠如。

3) 学校教育の不足。

4) 高い乳幼児死亡率。

林産物および日雇労働や政府プロジェクトが経済的な問題を軽減しているが、困難が残っている。問題の多くは、農業を中心とした生業には適合しない狩猟採集民文化から生じていると考えられる(*)。

(*) この研究で観察された狩猟採集民的な行動は、集団のメンバーが助けてくれるという信頼に根ざしているようだった。そしてその信頼は、分配の倫理に裏づけられていた。

生態学的な視点からみると、分配は狩猟の獲物の日々の変動や狩猟成功率の個人差を補完する。分配の倫理とそれに関連する行動は、狩猟採集民社会における食料の安定に貢献してきたと考えられる—ちょうど計画と準備が、農耕社会を支えてきたように。

問題は、等価交換の原理に基づかず、集団内でほぼ無制限に行われる分配が、各世帯が経済的な計画を立てることを難しくしているということである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Koizumi M, Mamung D, Levang P, Hunter-gatherers' culture, a major hindrance to a settled agricultural life: The case of the Penan Benalui of East Kalimantan, *Forests, Trees and Livelihoods* 21: 1-15, 2012, 査読有

DOI: 10.1080/14728028.2012.662626

② 小泉都、生物多様性の保全を地域社会の生活基盤の保全に結びつける—ボルネオの森林開発と地域社会、社会と倫理、第24号、17-30、2010、査読無

[学会発表] (計7件)

① Levang P, Koizumi M, Hunter-gatherers' culture, a major attraction and hindrance to tourism development: The case of the Punan of East Kalimantan, Congress of the International Society of Ethnobiology, 2012年5月20-25日、モンペリエ

② 小泉都、狩猟採集民から農耕民になるハードル—倫理・行動様式、研究集会「森林、

そして生態学の未来を描く—フィールドから理論へ—の出発点」、2011年11月5日、石川県立大学

③ 小泉都、インドネシアでの民族植物学調査、日本植物学会第74回大会、2010年9月9日、中部大学

④ 小泉都、生物多様性条約の目的を実現するために地域社会を理解する—ボルネオの狩猟採集民の生活と文化の現実、シンポジウム「誰が環境問題について考えるのか—環境政策における地域レベルの視点と取り組みの重要性」、2010年5月29日、南山大学

⑤ Koizumi M, The objective and methodology of natural science and its limitations in dealing with environmental problems, International Conference 'Changing nature of nature: New perspectives from transdisciplinary field science', 2009年12月17日、京都大学

⑥ Koizumi M, The Convention on Biological Diversity and Hunter-gatherers of Borneo, Exchange Lecture by Japanese Anthropologist on Nature and Society in Southeast Asia, 2009年9月28日、マレーシア大学サバ校

⑦ Koizumi M, Difficulties in applying the Convention on Biological Diversity to protect local knowledge and life in the humid tropics, International Conference 'International environmental treaties: their role, possibilities, risks and limitations', 2009年9月16日、南山大学

[図書] (計2件)

① 小泉都・市川昌弘、弘文堂、「熱帯林における先住民の知識と制度：その喪失・変容過程と社会構造」総合地球環境学研究所編『地球環境学事典』、2010、306-307

② 小泉都・服部志帆、人文書院、「生物多様性条約の現状における問題点と可能性—ボルネオ島の狩猟採集民の生活・文化の現実から」市川昌広、生方史数、内藤大輔編『熱帯アジアの人々と森林管理制度—現場からのガバナンス論』、2010、222-242

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小泉 都 (KOIZUMI MIYAKO)

京都大学・農学研究科・研究員

研究者番号：00506884

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

